

トーマス・ブレイク・グラバー

スコットランド出身のトーマス・ブレイク・グラバーは、日本を孤立した農耕社会から近代的な工業国へと変貌させる重要な役割を果たした。グラバーは、1859年に徳川幕府(1603~1868年)が本格的な国際貿易のために開港して以来、欧米人としては初めて日本に入国した一人である。彼はジャーディン・マセソン商会という会社の地方支店に就職したが、すぐにグラバー商会を設立した。グラバー商会を通して、銃や機械、蒸気船を輸入しながら、紅茶や木材などの輸出で財を成した。

グラバーは造船と採鉱が日本の近代化に不可欠であると考え、日本初の蒸気動力の船台と近代的な炭鉱の建設を支援した。これらの新しい産業を始めるために、彼は最先端の機械を輸入し、外国人技術者を雇った。グラバーは三菱会社の二代目社長、岩崎弥之助(1851~1908年)と親交が深く、亡くなるまで三菱と親交があった。

長崎滞在中、グラバーには多くの日本人の恋人がいて、クラバ富三郎(1871~1945年)とハナ・グラバー・ベネット(1876~1938年)の二人の子どもをもうけた。富三郎の母加賀マキ(故 1903)についてはあまり知られていないが、ハナの母淡路屋ツル(1851~1899年)は亡くなる 1899 年までグラバーと一緒に暮らしていた。

1908 年、グラバーは日本への貢献が認められ、日本政府から勲二等旭日章を授与された。1911 年 12 月 16 日、腎臓病のため東京で死去。
